

終戦、そしてシベリアへ

北海道 工藤清吉

昭和二十(一九四五年)八月十五日、天皇の終戦を告げる玉音放送は国内外に未曾有の大混乱を起こした。当時、私は中国東北部(旧満州)で派遣された部隊先から戦友と二人で原隊へ戻る途中であった。しかし、原隊もソ連軍の侵攻を避けるため移動して、元の地には居なかった。探して追って四平街へ来た時、終戦を知らされた。

この時を境に日本人の立場は中国人と逆転し、昨日までの権威と尊大さは失墜し、中国人が支配者となり、武器を持たない民間人は略奪暴行を受ける運命となった。特に開拓団の人達は屈強な男達は軍隊に召集され、老人と女子供達だけになっていた。ソ連軍の侵攻と中国人の襲撃で命からがら逃げて、力尽きて病人や子供を置き去りにし、万事休すと自決の悲劇があちこちで起きていた。

東豊の地で列車を捨て、小学校校舎を仮宿舍としての生活が始まったが、軍隊の階級制度は維持され、指揮命令も変わりなかったが、言葉に柔かさが出てきた。今まで上官の命令に一切逆らえなかった兵達が、きつい上官の言葉に「なにつ、もう一度言ってみろ」と言い返すと上官もそれ以上は言えなくなった。

武装解除は小銃、帯剣、弾薬、将校は拳銃を出したが軍刀だけは手離さなかった。「軍刀は軍人の魂なのだ」と強硬に応じなかった。

小学校での生活が半月くらいのと、各自持てるだけの衣服や日用品を持ち、残りの物は校庭に山のように積み上げられた。すると中国人達が大量集まってきた。彼等の衣服は黒色の綿布で「捨てるのなら俺にくれ」と言っているようだったが、やがて火がつけられた。我々が去った後、中国人達は炎の中から使えそうな物をすべて持ち去ったそうである。

一次待機所の建物は畳敷きの小部屋のある立派

私達は何とか原隊にたどり着いたが、部隊は列車を南に向かつて走らせ、鮮満国境を越えようと図った。この逃走中、貨車に積んでいた航空燃料のドラム缶をゴロンゴロンと走りながら捨てた。謀略による暴発を恐れたのか。

しかし朝鮮に近づく暇もなく、国境はソ連軍が進駐し通過できないと判明。部隊は列車のまま引き返すことになった。と、ある駅で動かなくなつた。聞けば、血気にはやる将校達が「日本が降伏しても我々は降伏しない。武器弾薬、食料を運んで山に籠もり徹底抗戦する」と、今会議中であるという。そんなことになったらどうしよう。上官の命令だと言われついて行ったら反抗部隊として掃射され死ぬことになるな、などと考えていた。三時間ほどして、「降伏は天皇の命令である。『耐え難きを耐え、忍び難きを忍び』と放送されたではないか」と老練将校の説得に若い将校は涙を流し降伏を認め、列車は再び動き出し、武装解除を受ける駐留地へ向つた。

なもので、何の作業もなく、三度の食事もまんざらでなく、入隊以来こんなんびりした生活は初めてで「こんな暮らしなら何日でもいいな」と思っていたが、これが最後の楽園で、やがてシベリアの飢餓と強制労働と厳寒が待ち受けているとは知らぬが仏であった。

また移動して二次待機所に移つたが、そこはただっ広い建物であった。ここでは部屋がないため、将校達は幕を張って自分達のプライバシーを確保した。この段階ではまだ夫人を同伴していた。帰国なのだから当然だが。

やがて列車に乗ることになり、貨車に米・麦・高粱等の穀物と味噌・醤油等を積み、その上に兵隊達が座つた。列車は走り出し北へ向つた。監視兵に聞くと異口同音に「ダモイ」(帰る)と答える。日本海から船で帰国できる、と誰もが信じて疑わなかった。北上するにつれて行先は黒河であることが分かった。

食事は給付されず自らの賄いになった。私達は

この駅での停車が長いと判断すると、木切れを集めて炊飯し食事を作った。しかし判断が当たらず、機関車の接続する音に慌てて生煮えの飯盒を持って飛び乗ることも度々あった。何しろ何分間の停車なのか全く伝わってこない。だから遠くまで行って用便するわけにはいかない。列車が動き出せば途中でも中止して乗らなければならない。ここに用便の跡だらけで不潔極まりないが帰国のためと我慢した。

私達とは反対にソ連兵を乗せた列車が南へ走っていた。ある時、停車した列車から茶髪の大柄な女が降りてその辺をうかがっている。私達は珍しさも手伝って彼女を注視した。彼女はその辺を歩きながら「こつちへ来るな」というしぐさをし、すばやく茂みの中にしやがみこんだ。どうやら用便をしたかったようだった。初めて見る外人女は魅力的だった。

列車が止まると、中国人の物売りが押し寄せてきた。しかしもう日本紙幣はただの紙切れになり人のような仕打ちを受けたことに憤慨した。ソ連兵に銃剣で威嚇されたよりも、もつとみじめであり、私達が敗戦の兵であることを強く自覚させられたのである。

この地でソ連軍の管理下で荷役作業をしている日本兵に会った。帰国するのになぜ作業をさせられるのか不可解に思ったが、この人達もいずれ帰国できるのだろう、お先にといい気持ちで通り過ぎた。

ソ連の貨車に乗り込んだがなかなか発車しない。夜半になってやっと動き出したが外は全く見えない。「シベリア鉄道本線に入って明朝前方が明るくなれば日本へ。後方が明るくなれば西へ走っている。そうなれば捕虜となって強制労働させられ帰国はできない」。この説明に皆納得した。実は東へ向っても帰国はできなかつたのだが……。願いの夜は長かった。

「後方が明るくなってきた」の声に列車は西へ向っていることが判明した時の絶望感は大きく、皆

下がり、敗戦の悲哀を実感した。

北上するにつれて列車の進行は遅くなり、停車時間が長くなり、黒河から対岸への渡船が混雑している気配が感じられた。出発の頃はまだ紅葉もしていなかったのに、木の葉はすっかり落ち、黒河でははや雪がちらついていた。

生死の間、シベリア抑留

昭和二十年八月終戦。中国東北部の日本軍はソ連軍の武装解除を受けた後、帰国すると信じ込まされて貨車に乗せられて北上し、黒河に着いたのは雪のちらつく頃になっていた。

そして国境の河、黒竜江を渡り、対岸のブラゴエシチェンスクに入ったとたんに、私達はこれまでの扱いとは一変した捕虜として屈辱的な待遇を味わわれたのである。

糧も外された全くの素裸にされ、鞭を持ったソ連女にまるで家畜のように追い回されたのだ。捕虜とはいえ、まだ帝国軍人としての誇りを失ってはいない。それが民間人とおぼしき女にまるで囚

虚脱状態になり溜息ばかりあちこちで放出した。どこまで連れて行かれるのか、どんな仕事をさせられるのか、どんな収容所に突っ込まれるのか、何を食べさせられるのか。不安は次々と出てくるが解答は何一つ与えられずに列車は森林の中を走り続けていく。

ある朝、海のような岸边に停車した。「おお日本海だ、我々は帰れるぞ」と喜ぶ者がいた。「いや違う、日本海ではない。バイカル湖だ、水を舐めてみる」との声で皆確かめたが塩気はなかった。これで帰国の望みは完全に断たれ、皆押し黙ってしまった。

そのうち「何年間強制労働させられるのか」「いや、ジュネーブ協定という捕虜に関する国際条約があるから一時的に収容されるだけだ」「ならなぜ西の方へ連れて行くのだ」「二年間は覚悟すべきただ」「二年間もか、俺の身体はそれまで耐えられるかなあ」と喧々……。

大きな街の駅に着き下車した。かなり古い街並

みと見受けたがそこはイルクーツク市であった。市民は厚ぼつたい綿入れの上下服を着こみ、男は前立てのついたシャープカ、女は厚手のスカーフで完全な冬支度であった。

トラックに分乗して街中を突き抜け郊外のラীগりに収容された。周囲の有刺鉄線や望楼は新しくあったが、建物は古く囚人を収容したものに間違いない。私達はシベリア流刑人となったのだ、日本からはるかに離れた地で。

窓は小さな二重窓で白く凍りつき、暖房は小さなペチカだけ、触っても暖かくはない。匏もかけない板の二段ベッドに毛布を敷き、防寒具を掛けて横たわると涙が止めどもなく流れ、母や姉達の顔が浮かんだ。

私の最初の仕事は、貨車で送られてきた部厚い木の皮を降ろす作業だった。経験したことのない寒さで着ていた防寒具は役に立たず、手足を凍傷にかける者が続出した。私も足の感覚がなくなり「やられたか」と思ったことが何度もあった。作

で死滅さしてもらった後はしばらく痒くない暮しのできたが元の木阿弥になった。

私自身も脚気の症状が出て脚がだるく、夜目が霞んで見えなくなつた。体力も衰えてふらふらになり、小さな水溜りも飛び越せず回り道をした。階段も登る力がなくなりはつて登つた。一日一日が生死の間で、朝起きたら隣の者が死んでいたということもあった。

戦争が終つて帰国できると思ったのに、このシベリアで死ななければならぬかと呪つた。

ラポータ ダワイのシベリア

昭和二十一年のシベリア抑留生活は悲惨を極めた。食事が劣悪な上に重労働を課せられ、かつて経験したことのない厳寒と悪環境にあえいでいた。栄養不良の体に伝染病が襲いかかり抗すべき術もないまま十人に一人はシベリアの凍土に埋められていったのだ。

戦争が終つて帰ろうと思つていたのに何ということだ。終戦の詔書で天皇は「耐え難きを堪え、

業場ではあの皮を燃やして暖を取つたが、かざした手や顔は熱くとも、背中では寒く足は冷たいままだった。

厳寒に耐えるだけでも精いっぱいなのに、食事が乏しい。主食の黒パンが一日三五〇グラム。夕食時分配され三食に分けて食べると言うが夕食に全部食べてしまう。でないとき空腹で眠れない。例え残しても夜中に盗まれてしまうからだつた。だから朝と昼は雑穀粥だけだ。

その粥も柔かで飯盒に半分もない。これでは到底労働する者の食事ではない。私達はたちまち栄養不足で体重を減らしていった。それに加えて虱が発生し容赦なく血を吸い取つた。毎晩虱取りが日課となつた。私達が痩せ細つているのに虱は丸々と肥え太つて、潰すとパチンという音をたて血が飛び散つた。

発疹チフス騒動で虱を退治する為、夜肌着を外へ出して凍らせ駆除しようとしたが効果はなかつた。街中まで出かけ高熱缶で身ぐるみ脱いで卵ま

忍び難きを忍び」と述べたが、耐えることも忍ぶこともできず力尽きたのである。

故郷に帰つて肉親に会いたかつたであろう斃たおれた者達はどんなに悔しかつたことか。

当初の労働は雑役が多かつた。貨車に積まれた染料の木皮おろし、石炭、木材おろし、塩、穀物おろしなど。体力のない私達にとつて、ノルマ(課せられた作業量)はきつかつた。上下水道工事の穴掘りは大変効率の悪い作業であつた。つるはしと鉄の棒だけで凍つた粘土質の土には歯が立たない。監督から「ダワイダワイ」とノルマの完遂をどやされた。

塩漬けされた牛や羊の皮をなめす工場で皮運びの仕事をした。羊の皮は軽いが牛の皮は重い。ずるずる引つ張つて運ぶには体力が要る。他人が寝ている時起き、深夜から朝まで働くのは辛くて苦しかった。

皮のあちこちにこびりついている肉片を削り取つて持ち帰り、塩抜きして缶詰缶で煮て食べた。

生き延びるために見つけた策であった。

住宅建築場にも行った。内壁と外壁の間に防寒材として炭殻を入れる。それを運ぶ。暖房は煉瓦でペチカを積む。その煉瓦は大きく重かった。ロシアの大工は日本の大工のように切り込みをしておいて一挙に建てることはしない。作業量が目に見える形にならないければ認められない。国の違いを見せられた。

広い機械置場での作業もあった。どうやら戦利品としてドイツから運んだものらしかった。その中には私が見た事もない巨大なクレーンやブルドーザーがあり、鉄材を移動させた。機械類は日本より進歩している実証を見せられ、これでは戦争に負けても当然だと思った。

これらの機材を受け入れ整理保管し、受注者に引き渡すのが任務らしい。私はワイヤの掛け外しの助手役で、体力はいらぬが危険が伴う。うっかりすると機材に挟まれたりぶつかったりする。一時も気の抜けない緊張が強いられた。作業を終

しをしながらの労働は筆舌に尽くし難い辛酸があったと聞いている。中央の監視から遠のくほど、環境は悪く、栄養失調、伝染病で多くの犠牲者を出したのも事実なのである。

月に一度の健康診断があった。診断とは名ばかりで、体重を測り前月と比べるだけで、お腹が大きくなった女医が兵達のお尻の肉をつまんで筋肉の張り具合を見るだけで、聴診器を当ててもなく、状態をどうかと問うこともなく「ハラシヨ」（良好）といつも重労働に回された。健康だったお蔭様か。

こんな殺伐とした生活の中の話は専ら食べる事であった。おいしかったご馳走の話、満腹するまで食べた話をして溜息をついた。また性欲の話もよく出た。年配の男達の遊郭通いの得意げな話、既婚者達の性愛の話などは、経験のない私にとっては新鮮で羨望の限りであった。男と生まれ女を抱くこともなく死にたくない。絶対生きて帰ると自分に誓った。

えるとくたくたに疲れていた。それでも「お仕事お疲れ様」とねぎらってくれる人もいなければ、特に多くの食事に当たることもない寂しいものだった。

肉加工場の夜間作業に駆り出された。羊や牛の肉の運搬だ。力仕事は大変だったが楽しみもあった。監視の目を盗んで肉を切り取り持ち帰って煮て食べた。大変なご馳走だった。一カ月ぐらい働いたら、「お前、こけていた頬がふくらんできたぞ」と言われた。

ある日監督は私達を連れて、全く違う作業場へ行った。そこにはロシアの男達が働いていた。屈強な男達は筋肉もあり、力仕事をバリバリこなす。その手伝いをさせられたが到底彼等にはかない。俺達だって腹いっぱい食べられたら負けないさ」とつぶやいたが、負け惜しみでしかなかった。

鉄道建設とか木材伐採の作業に使役された部隊の兵達は、何の施設もない森林地帯にテント暮ら

「ここに腹いっぱい食べられるご馳走と、自由にできる女とがいて、どちらか一方だけ取れと言ったらお前はどちらを取るか」などと突拍子もない議論を本気でやり合った。私は未経験の女の方に惹かれたが、大勢は食べる方を取り、食に対する執着心の強さを表した。

作業場で触れ合うロシア女達とのカタコト会話は「妻はいるか、子どもは何人か、日本では何をしていたか」等他愛もない会話ではあったが、心がなごみ慰められた。ラーゲルの限られた生活の中で荒んだ男達の心は、女の容姿や会話でどれほど生き甲斐を与えられたことか、当事者でなければ分かるまい。女達が捕虜と蔑視しなかったことも救いだった。

ラーゲルの民主運動

昭和二十年八月終戦、帝国陸軍は解散し、私達はシベリアへ抑留される身となった。病人食のよう少ない食事で強制労働。すし詰め状態での荒板寝台に毛布一枚、寒さと空腹で眠れない夜、そ

していつ帰国できるか、全く見通しのない極限の毎日が続いた。

こうした悪環境のなかでも将校、下士官、兵の階級組織は存在していた。誰もが上官の命令に従って行動するという習性を持ち、それが当然とする特異な社会でもあった。

そのうち、ソ連軍の管理下にある捕虜は、解散した軍隊組織を維持する必要はないのではないかと主張する人達が出てきた。集団生活をする以上、秩序と統制は必要だが、それは軍隊の階級によってではなく、集団の話し合いの合議で決めるべきではないのか、と。

民主主義と称する耳慣れない言葉が使われ出した。私達には階級が消滅した以上、上下関係は存在しない。各人は平等なのだから命令も無いし服従義務も無い。これに対し将校や下士官達は、捕虜という身分である以上、軍人である。軍人である以上、階級は帰国するまで存在すると反論した。そして兵達がとつくに捨て去った階級章を依然と

場になったことである。これは従来の命令社会が崩壊したことを意味し、大きな進歩と改革であった。班長、療長、役員等が話し合いや選挙で選ばれた。現在の私達には当然のことではあるが、当時のラーゲルでは画期的な大改革であったのだ。

壁新聞なるものが貼り出され、自分の考えや主張が掲載され、リーダーのアピールに一役買っていったし、文筆家による文芸作品も皆に読まれた。私も「枯れるえぞ松」と題したアイヌ民族と和人の戦いを創作して載せてもらった。それには絵の得意な人が挿し絵を描いてくれ作品を楽しいものにした。

軍隊にはあらゆる職業の人がいて、種々様々な活動が表現できる社会でもあった。最悪の環境にあっても、人々はより良き生活と潤いを求めて生き甲斐を探して努力していたのだ。

皆、食にも飢えていたが活字にも飢えていた。本や印刷物を持つ余裕がなかったばかりか、外部からの印刷物は一切入ってこない。ある日「日本

してつけていた。

「民主主義の原則は多数決である。すべての物は多数決によって決められる」この事は私達が今までの教育では受けたことのない新しい考え方であった。軍隊では階級が絶対で、同階級であっても一日でも早く入隊した者、一日でも早く昇任した者が先任者として羽振りをきかし下位の者に君臨していた。特に高等教育を受けてきた者に対する風当たりは強く、大学出身者には「ここは娑婆ではないぞ」と徹底的にいじめ抜いていたのである。

そういう反動からか、初期の民主主義提唱者にはインテリ層の人達が多かつたと思う。

日常生活のきまり事等は班会議を開き、各人の意見を吸い上げてまとめたものが決定されるという、今までの上意下達から下意上達の形式に改められていった。

この段階で変わったことは、今まで自分の考えや意見を阻まれていた人達が自由にもが言える立場になった。新聞と称する新聞半ページくらいのものが壁に貼られた。皆貪るように読んだ。「これは日本から来たのか」「いや違う。ソ連軍監視の下に編集された我々捕虜向けのものだ」という結論におちついた。

内容は、民主運動の指針やラーゲル内の運動の成果などで、私達の最も関心事である帰国の見通しの記事はどこにもなかったし、日本国内の記事も一切なく物足りないものであった。

こうした改革運動によって軍隊の階級は権威を失い、将校達は自分達の班に集まり、私達とは直接顔を合わすことなく、下士官達の中にも運動に参加する人達が出てきた。

そもそも捕虜に対する待遇は将校と兵では違うように国際条約で決められているというのだ。まづ食べ物の質が違う。私達には労働用の黒パンだが、将校には白パンで労働が課せられない。この待遇差には不満であったがいかなともし難い現実であった。

「よく働いてノルマを完遂した人達から帰国させる」とか「民主運動に参加して共産主義に共鳴した者から先に帰れる」とか噂されたが、どれが本当なのかは定かではなかった。ソ連が労働力を目的とした抑留からも病弱者が早く帰されたことだけは確かなことであつた。私の帰国が遅れたのもうなずける。

民主学習会が夕食後や休日によくもたれた。参加は強制されなかったが、理論的に勝った者がリーダーになっていった。そしてラーゲルの生活向上の為にソ連側とも折衝した。

明治以降の日本の資本主義社会としての歩んだ歴史が検証され、大陸進出の野望とその結果の敗戦。民主主義社会はどうあるべきか、これからの社会の方向について進路を見つけようとしていた期間となり、他のラーゲルとの交流会も持たれ討論し合った。

行き過ぎたラーゲルの民主運動

昭和二十一年から二十二年にかけて、軍隊の命

抑留初期の頃は「我々は捕虜なのだから無事に日本に帰ることが本務である。だから労働には体力消耗を押えて健康維持を本分とすべし」この意見は正論と思われた。

また、「ソ連の国力増強の為に我々捕虜は協力すべきではない。労働は最小限度にすべきだ」とした。だが現実にはソ連が不足した労働力を補う目的で、国際条約を無視して抑留したのであるから、こんな理屈は通るものではない、ソ連労働者と同等の作業ノルマを課せられたのである。

「労働者農民の国ソビエトは我々労働者、農民にとって尊敬すべき国である。だから労働には積極的に参加すべきである」と洗脳されたリーダー達によって作業の能率化を図る為に作業班が編成されていた。

一つの班が十数人で現場監督から受けた作業を班全体で受けて、班長が班員の技術や能力、協力関係を考慮して作業を割り振りした。

私も班内では一番の若輩であつたが、推されて

令服従という体系は民主主義運動によって次第に消滅し、インテリ層による民主組織が定着していった。その運動の指針となつたのが、ハバロフスク地区で編集されたといわれる「日本新聞」であつた。その論説には「ソビエトは労働者と農民が主権を持つ国である。だからラーゲルでも労働者や農民がリーダーシップをとるべきである」とプロパガンダしていた。このことが行き過ぎを招いた。

民主運動初期の頃は、インテリ層のリーダーシップに無批判に従つていた兵達が、次第に自己の主張をするようになった。インテリ層のリーダー達はとかく口先だけが立派だが実行力が伴わないことから、実行力のある者の発言が支持を得て役職についていった。

二十三年頃には、ラーゲルの指導幹部は、労働者、農民の出身者にとって代わり、かつての民主主義提唱者はその座を追われ、単なる一抑留者になり下がっていた。

班長になつた。作業が順調に進められるよう現場監督との折衝や対外交渉もやつた。直接作業をしないので身体的に楽だったが精神的には疲れる仕事だつた。それに対する班員からの評価は「指示、報告、交渉などは申し分ないが、堅くてユーモアに欠ける」と言われた。やはり人の上に立つ経験不足と若気の至りを否めないということであつた。どの世間でも「やりすぎ」ということはおこるもので、レーニンとロシア革命を崇拜するあまり、リーダーになつた者達が、労働者農民出身者以外の者が役職につくことを嫌がるようになっていった。有能なインテリ層や技術者、文化人を排除するような風潮を見せたのである。これは自己卑下からなのか。

休日などに集会がもたれ「自己批判」といつて自分の過去について告白し、民主主義に照らして間違つた言動はなかつたかと自分で検証するのである。もしこの集会で「自分の過去に誤りはなかつた」とでも言おうものなら「お前は全く自己批

判をしていない」と激しく突き上げをくらい、役職を剥ぎ取られた。

労働者農民出身者以外の経験者はすべて否定するという極端に走る者さえ出てきた。もうこうなつては方向を修正しようと思見を出しても、逆に「お前は民主主義の否定者だ、反動だ」の烙印を押されて排除された。

まして嫌気がさして集会に参加しない者は集会に引きずり出されて、徹底的に吊し上げられた。これは明らかに運動の行き過ぎであり、集団の暴力と心理的リンチでもあったのだ。

リーダーシップを握った者達は、あたかも自分達が支配者になったかのような錯覚を起こしていた。こうなつてはどうしようもない、正常な感覚を持った者は「逆らつて睨まれるよりは同調する振りをしてやり過ぎるのが賢明」とつくろう者が多かつた。

運動の行き過ぎによつて、ラーゲルの生活は何かギスギスしたものになつていた。しかし、中に

同じ抑留者でもそんな人もいたのだ。

ナホトカから舞鶴へ

私がシベリアに抑留され、極寒の冬を四度耐え忍んで昭和二十四年の春が巡り来た。今年こそ帰国できるのでは、との望みを、もう三回も打ち碎かれたが、現実味を帯びてきた。

この四年間、貧しい食事と、腹いっぱい食べたことと思いを押さえられ、毎日の強制労働にもソ連流の働き方に慣れていた。身につけて入ソした衣服や靴や手袋は、ラーゲル支給の分厚い綿入れ毛皮のシューバ（外套）、カートンケ（堅いフェルト製）という履物に代わり、外見はソ連人と全く同じになつていた。

本当に帰国できるのなら、どんな辛いことでも我慢しよう、という気になつた。ここまできて怪我や病気になるらぬよう気をつけ、五体満足な身体で親姉弟に再会したいと思つた。

当時、私の体重は毎月の健康診断で五十八キロだつたから現在の体重と同じで、よくこの体重で

はこうした出しやばり者をたしなめるリーダーもいて、行き過ぎを修正しながら常識的な民主運動をすすめていったのである。

この運動で私が見たものは、今まで知らなかつた社会の仕組みがあること。経済面からの資本主義と社会主義、もつと進めた共産主義。そして世界は米国を主軸とする自由主義国家、ソ連を盟主とする共産主義国家の対立。我が祖国日本のおかれた立場は、米国の占領下にある現実の中で民主主義社会をどう発展させるべきかということであつた。

それにしても我々の帰国はどうなつているのか。正確な情報ではないが、貨車に乗せられた日本人らしき人々が我々に手を振つて東へ行くのを目撃した、とか、帰国はもう始まつている、等の噂がとび交うようになったことは、私達に大きな希望と期待を与えてくれた。

特殊技能を生かせる者は、その技能の代償としてパンの増量や賃金を受けた者もいたと聞いた。

毎日の重労働に耐えていたものと今更のごとく感じ、それは若さの故か。

帰国できる、との希望を与えられて、一日一日が待ち遠しい生活に明け暮れていた。そんなある日、ソ連軍人達の慰問団がラーゲルを訪れ、合唱と踊りを見せてくれた。

男声二部合唱もすばらしかつたが、それにも増して兵士達の踊りを見た時、盆踊りぐらいしか見たことのない私には、その軽快な脚の動き、敏捷さ、スクラムを組む集団的踊りに目を見張つた。特に腕の動きよりも、脚の動きが表現豊かであるのにはうならされた。

たった一人だけ小柄な女性がいて、今まで見た事がないミニスカートで太股まで丸出しであつた。戦時中の女性達は皆モンペ姿で脛を見せることはなかつたし、ソ連女性達のスカート丈は膝下までだつたから、私にとっては生れて初めて見せられた女性の太股だつたので「おおっ」と衝撃を受けた。

それどころか、踊っている時や、舞台から飛び降りた時にスカートがめくり上って太股深く見えた時、思わず「うわっ」と息を呑んだ。現在は誰も気に留めない肢体だが、当時は超新鮮で強烈なショックであった。

八月に入ると毎日課せられていた作業がなく帰国の準備に入った。といつてもリーダー達から「帰国後どうあるべきか」と、いわば民主主義運動に参加し祖国の民主化に貢献すべし、ということであった。

入ソする時は、持てるだけの物を背負ってきたが、帰る時は雑囊だけの軽装で、貨物車に乗り東へ向けて走り出した時、四年前西へ向けて走り、絶望に打ちのめされた時のことを思い出し、夢ではないぞ、と言いつ聞かせた。

ナホトカに着いて一週間ほど、その間中也連日、帰国後の活動についてたき込まれた。そのうえ、自分の決意を述べさせられた。本気に決意を語る者もいたが、その場凌ぎの言い訳程度の者も多く

肉親との再会に期待した。

下船が始まり長いタラップを降りきった所で一人の女性が「長い間御苦労様でした」と挨拶してくれた。帰ったぞ、と抱きつきたい衝動に駆られた。出迎えの人々で棧橋はごった返していた。中には探す相手を見つけ呼び合う人達を私は羨望の思いで見ている。

引揚援護局施設で五日まで滞在し、四年一カ月の軍人給料三千二十円と帰郷旅費千円、衣料品・日用品等二十点ほど支給された。

抑留の長さど苦しさに対する代償としては余りにも少ないものだった。後、軍人恩給制度が何回も改正されたが、抑留が戦地加算とならなかった為に、私は最後まで恩給の対象者にならなかった。

日本海沿線での湯茶の接待に同胞の温かさに感激し、函館に着くと道内から大勢が出迎えていた。私が入隊する時、日の丸で見送ってくれた豊富町兜沼駅に、深夜の終列車で降り立った私を出迎えてくれたのは二人の姉だけだった。これが五年間

見受けられた。

「書いた物は持たず、もし持っていたら今すぐ出せ、見つけたら帰国させない」と威され、やむなく亡き戦友の住所を書いたものも出さざるを得ない状況になっていた。

ついに乗船の日がやってきた。もうシベリアの地で寝ることはないのだと思うと心が躍った。乗船タラップの前に並ばされ、ソ連将校が「クドーサーキチ」と呼んだ。タラップを上がり船上の人となった時、これで本当に日本に帰れるんだ、と実感した。

引揚船は山澄丸といい、貨物船で船内は狭苦しく、換気も悪かったが、誰も苦情は言わず、四年ぶりの米飯の日本食に皆満足し、帰国の喜びに浸り、涙を流す者さえいた。

船は二日二晩日本海を南下し、三日目の九月一日の朝、舞鶴へ迫っていた。「日本が見えたぞ」の声に皆甲板に出て、近づく祖国の木々の緑に「やっと生きて帰ってきたぞ」と心の中でつぶやき、

の労苦の報償とは。嗚呼。

あの日から半世紀以上。私にとって生涯忘れられない辛苦の五年間であった。平成十五年、私達の金婚を機に東舞鶴の引揚記念館を訪れたが、あの棧橋は日の丸の旗だけだった。

【執筆者の紹介】

出生、軍国少年時代、終戦まで
大正十四年六月二十日 豊富村兜沼に出生
昭和 八年 五月 開拓農家の父と弟を亡くす
昭和十五年 三月 兜沼尋常高等小学校卒
昭和十六年 十月 留萌国民学校初等科准教員養成所修了
同年 十一月 天塩郡幌延村立下沼国民学校 歴任
昭和十八年 二月 豊富村立豊富国民学校歴任
昭和十九年 四月 豊富村立徳満国民学校歴任
同年 八月 千葉県、陸軍第四航空教育隊 入隊

昭和二十年 一月 関東州熊岳城第二十二練成飛行隊に転属。後、流行性脳脊髄膜炎で陸軍病院に入院。家族には「キトク」の入電。陸

軍一式戦(隼)での特攻訓練中、格納庫に突入する惨事が起きる。

同年 六月 部隊は北満州に移動。

同年 八月 教育隊に派遣中、ソ連軍の進攻。原隊に戻る途中、新京(長春)で邦人の避難列車に遭遇。その後四平街で終戦を聞く。

(北海道 五十嵐 甚吉)

青春無残の追憶

岩手県 千葉 義一

一、シベリア送り

少民屯收容所で帰国を待つ束の間は兵士達の平和な保養の日々でもあった。戦友同士出身地の住所を交換し、早く帰った者が戦友宅に生存の連絡をとることなど交遊を深めたり、家郷の子供自慢を語る召集兵。満州に残した家族を思いやる在満補充兵など、心は早や家郷に帰る手筈を整えている。

隣町千厩町出身の一中隊の幹部候補生仲間の菊地四郎が收容所内で偶然にも、二月に一緒に入隊した歩兵連隊の実兄満男とばったり会って、互いに元気であることを喜び合っていた。後にシベリアでは兄弟別の收容所に分かれ、昭和二十一年(一九四六)年一月十日、同じ日に兄弟共に病死する悲運に見舞われている。